

かくれんぼとマンゴー?? — ザンビアと日本の子どもの遊び —

「かくれんぼ」「ハンカチ落とし」「手遊び」「ゴムとび」。

これは日本ではなく、ザンビアの農村部における子どもの遊びだ(写真①)。

初めてのフィールドワークでザンビア農村部に滞在していたとき、まだ言葉がわからなかった私は子どもに混ざって遊ぶことが多かった。そのなかで、私自身が幼少期に遊んでいたものと似たような遊びに出会うことが度々あり、子どもの遊びに興味を持った。

ここではザンビア南部地域に暮らす農耕民、トンガの間でみられた遊びについて、日本との共通点や差異に注目しながら紹介してみたい。

「マンゴー！」はかくれんぼの合図

同じような遊びでも、国や地域によって様々な差異が生じることがある。身近な例を上げるなら、「はないちもんめ」の歌詞が地域ごとに異なることは有名である。

私がザンビアの村で驚いたのは、以下のようなくれんぼの掛け声である。

オニの子ども「Mango！（マンゴー！）」
他の子ども「Tanapya！（ターナーピャ！）」

日本でかくれんぼをするときの掛け声といえは、「もういいーかい?」「まーだだよ!」が一般的であろう。ザンビアの村の掛け声において、オニの子どもが叫んでいる「Mango!」は、文字通り果物のマンゴーのことである。「Tanapya」とは、トンガ語で「まだ熟れていない」、すなわち「マンゴーがまだ熟していない」ことを意味している。つまりかくれんぼの掛け声として、「マンゴー!」「まだ熟していない!」と言いつているのだ。

「もういいーかい!」「まーだだよ!」はかくれんぼをしていることを直接的に表しているが、この「マンゴー!」の掛け合いは比喩的である。どうしてこのような掛け声になったのかはわからないが、音の響きや語呂の良さが心地よく、聞くと微笑ましい気分になる。

ちなみに、日本では子どもが隠れたら「もういいーいよ!」と掛け声を変化させて知らせるが、ザンビアの村では掛け声を言わなくなることが合図になっているようであった。

お手玉+おはじき=?

私は子どものころ、「お手玉」が得意だった。



写真①ゴムとびをして遊ぶ子どもたち

75



写真②ヤータで遊ぶ少女たち

私の通っていた小学校では「腕くらべ大会」なるものがあつた。冬に行われるその行事では、おはじき、お手玉、けん玉、コマ、百人一首など、自分で選んだ遊びを練習し、大会に臨む。私はお手玉を選び、家でよく練習していた。なんと、ザンビアの村には、その懐かしいお手玉とおはじきを組み合わせたような遊びが存在していた。それは、「yata (ヤータ)」という女の子がよく行う遊びである(写真②)。私はこの遊びの存在を知った時、夢中になって遊んだ。

ヤータの遊び方は以下の通りである。

1. 写真②のように複数人の子どもが地面に掘った浅い穴を囲んで座る。
 2. 穴には適当な大きさの石ころをいくつか入れておく。
 3. 手持ちの石(ゴルフボール大くらいの丸くて投げやすい石や木の実を用いる)を上に向けている間に、穴から石をいくつか外に出す。
 4. 手持ちの石をキャッチする。
 5. 再び手持ちの石を上に向けている間に、先ほど穴から出した石が決められた数だけ穴の外側に残るように、余分な石を戻す。
- *石を残す数は、最初は1から始まり、クリアできると徐々に増えていく。

ヤータのすごいところは、道具がいらないところである。地面に穴をほって、石を集めてくればどこでもできる。

小さい頃にお手玉を練習していた私は、この遊びを見た時に自信満々に参戦した。しかし、実際やってみると、ヤータには、石を投げてキャッチするという動作と、石を取り出す/戻すという動作、そして数を数えるという行為が組み合わせられていて、なかなか難しかった。子どもたちに何回も対戦を申し込み、ようやくともに戦えるようになったが、今でも勝ったり負けたりで、おとなげなく喜んだり悔しんだりしている。

まねして育つ

子どもはよく大人のまねをして遊ぶ。日本では、「ままごと」のようにお父さん役やお母さん役を決めて、料理をしたり、食事をしたりすることをまねて遊ぶ。

一方で、ザンビアの村では真似をする内容も少し趣が異なる。例えば、村では女性が成人を迎えるときに行う儀礼があり、そのときだけ披露される特別なダンスがある。女の子たちは、いつか自分がその儀礼の主役になる日を夢見て、よくまねて歌い、踊っている(写真③)。

男の子であれば、青年が牛を誘導するときに



写真③成人のダンスを真似る女の子たち

77



写真④大人の真似をして家で雑草を刈る子ども

使用するムチを身近な材料で自作し、牛を扱うときの掛け声をまねして遊んでいる。また、農作業のときの、雑草を刈る動作をまねすることもある(写真④)。家の近くに生えている雑草を相手にエッセエッセと身体を動かしている様を見ると、大人たちは笑いながら子どもを見つめ、「おーい、あっちもやってくれー」と楽しげに声をかける。

誰かが手取り足取り教えたわけではないのに、子どもはひとりでに生活の動作を覚え、いつのまにか育っている。まねをする内容は違えども、ザンビアでも日本でも、大人のまねをすることが子どもの成長の証となっている。

日本の子どもたちにとっては、アフリカの子どもたちが何をして遊んでいるかなんて、なかなか想像がつかないことであると思う。しかし、ザンビアの村には日本の遊びと共通点のある遊びがたくさんある。アフリカは日本から遥か遠い大陸のように思えるが、身近な遊びに共通点があることを知れば、私たちとアフリカの距離がまた一歩、近づくのではないだろうか。

伊藤千尋